

日本標準商品分類番号	876313
承認番号	15700EZZ00993000
薬価収載	適用外
販売開始	1971年6月

生物由来製品 ウイルスワクチン類
劇薬 日本薬局方 生物学的製剤基準
処方箋医薬品^{注)}

乾燥弱毒生麻しんワクチン

販売名:「ビケンCAM」

貯法: 遮光して、5℃以下に保存(【取扱い上の注意】参照)
有効期間: 検定合格日から1年(最終有効年月日は外箱等に表示)
注)注意-医師等の処方箋により使用すること

【接種不適当者(予防接種を受けることが適当でない者)】

被接種者が次のいずれかに該当すると認められる場合には、接種を行ってはならない。

1. 明らかな発熱を呈している者
2. 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
3. 本剤の成分によってアナフィラキシーを呈したことがあることが明らかな者
4. 明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する者及び免疫抑制をきたす治療を受けている者(「相互作用」の項参照)
5. 妊娠していることが明らかな者
6. 上記に掲げる者のほか、予防接種を行うことが不適当な状態にある者

【製法の概要及び組成・性状】

1. 製法の概要

本剤は、弱毒生麻しんウイルス(田辺株)を伝染性の疾患に感染していないニワトリ胚培養細胞で増殖させ、得たウイルス液を精製し、安定剤を加え充填した後、凍結乾燥したものである。

なお、本剤は製造工程でウシの血液由来成分(血清)、乳由来成分(ラクトース)及びブタの脾臓由来成分(トリプシン)を使用している。

**2. 組成

本剤を添付の溶剤(日本薬局方注射用水)0.7mLで溶解した時、液剤0.5mL中に次の成分を含有する。

	成分	分量
有効成分	弱毒生麻しんウイルス(田辺株)	5000PFU以上
緩衝剤	リン酸水素ナトリウム水和物 リン酸二水素ナトリウム	0.7 mg 0.07mg
安定剤	乳糖水和物 D-ソルビトール L-グルタミン酸ナトリウム	18 mg 5.4 mg 1.8 mg
抗菌剤	カナマイシン硫酸塩 エリスロマイシンラクトビオン酸塩	36µg(力価)以下 11µg(力価)以下
着色剤	フェノールレッド	7µg以下
希釈剤	TCM-199(炭酸水素ナトリウム、フェノールレッド含)	残量

乳糖水和物・エリスロマイシンラクトビオン酸塩: ウシの乳由来成分。

抗菌剤及び着色剤はウイルス培養に用いるMEM培地及びTCM-199(炭酸水素ナトリウム、フェノールレッド含)培地中に含有する。

3. 性状

本剤は、微赤白色の乾燥製剤である。

添付の溶剤を加えると、速やかに溶解して帯赤色の澄明な液剤となる。

pH: 6.8~8.5

浸透圧比(生理食塩液に対する比): 1.0 ± 0.2

**【効能又は効果】

麻しんの予防

【用法及び用量】

本剤を添付の溶剤(日本薬局方注射用水)0.7mLで溶解し、通常、その0.5mLを1回皮下に注射する。

用法及び用量に関連する接種上の注意

1. 接種対象者

(1) 定期の予防接種

- 1) 第1期 生後12月から24月に至るまでの間にある者。
- 2) 第2期 5歳以上7歳未満の者であって、小学校就学の始期に達する日の1年前の日から当該始期に達する日の前日までの間にある者(小学校就学前の1年間にある者)。

(2) 任意の予防接種

任意接種として、性、年齢に関係なく接種できる。

2. 輸血及びガンマグロブリン製剤投与との関係

輸血又はガンマグロブリン製剤の投与を受けた者は、通常、3カ月以上間隔を置いて本剤を接種すること。また、ガンマグロブリン製剤の大量療法において200mg/kg以上投与を受けた者は、6カ月以上間隔を置いて本剤を接種すること。(「相互作用」の項参照)

3. 他のワクチン製剤との接種間隔

他の生ワクチンの接種を受けた者は、通常、27日以上間隔を置いて本剤を接種すること。（「相互作用」の項参照）

また、不活化ワクチンの接種を受けた者は、通常、6日以上間隔を置いて本剤を接種すること。

ただし、医師が必要と認めた場合には、同時に接種することができる（なお、本剤を他のワクチンと混合して接種してはならない）。

【接種上の注意】

1. 接種要注意者（接種の判断を行うに際し、注意を要する者）

被接種者が次のいずれかに該当すると認められる場合は、健康状態及び体質を勘案し、診察及び接種適否の判断を慎重に行い、予防接種の必要性、副反応、有用性について十分な説明を行い、同意を確実に得た上で、注意して接種すること。

- (1)心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害等の基礎疾患を有する者
- (2)予防接種で接種後2日以内に発熱のみられた者及び全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を呈したことがある者
- (3)過去にけいれんの既往のある者
- (4)過去に免疫不全の診断がなされている者及び近親者に先天性免疫不全症の者がいる者
- (5)本剤の成分に対してアレルギーを呈するおそれのある者

2. 重要な基本的注意

- (1)本剤は、「**予防接種実施規則**」及び「**定期接種実施要領**」に準拠して使用すること。
- (2)被接種者について、**接種前に必ず問診、検温及び診察**（視診、聴診等）によって健康状態を調べること。
- (3)被接種者又はその保護者に、接種当日は過激な運動は避け、接種部位を清潔に保ち、また、接種直後及び5～14日の間の**健康監視**に留意し、局所の異常反応や体調の変化、さらに高熱、けいれん等の**異常な症状**を呈した場合には、速やかに**医師の診察**を受けるよう事前に知らせること。

3. 相互作用

(1) 併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
副腎皮質ステロイド剤 プレドニゾロン等	本生ワクチン接種により、右記機序で麻しん様症状があらわれるおそれがあるので接種しないこと。	免疫機能抑制下で本剤を接種すると、ワクチンウイルスの感染を増強あるいは持続させる可能性がある。 免疫抑制的な作用を持つ薬剤の投与を受けている者、特に長期あるいは大量投与を受けている者、又は投与中止後6カ月以内の者。
免疫抑制剤 シクロスポリン サンディムン タクロリムス プロGRAF アザチオプリン イムラン 等		

(2) 併用注意（併用に注意すること）

- 1) 輸血及びガンマグロブリン製剤投与との関係
本剤を輸血及びガンマグロブリン製剤の投与を受けた者に接種した場合、輸血及びガンマグロブリン製剤中に麻しん抗体が含まれると、ワクチンウイルスが中和されて増殖の抑制が起こり、本剤の効果が得られないおそれがある。
接種前3カ月以内に輸血又はガンマグロブリン製剤の投与を受けた者は、3カ月以上すぎるまで本剤の接種を延期すること。また、ガンマグロブリン製剤の大量療法、すなわち川崎病、特発性血小板減少性紫斑病（ITP）の治療において200mg/kg以上投与を受けた者は、6カ月以上（麻しん感染の危険性が低い場合は11カ月以上）すぎるまで接種を延期すること。
本剤接種後14日以内にガンマグロブリン製剤を投与した場合は、投与後3カ月以上経過した後に本剤を再接種することが望ましい。
- 2) ツベルクリン反応検査との関係
本剤接種後、細胞性免疫の抑制が起こり1カ月以内は、ツベルクリン反応が弱くなることもある。
- 3) 他の生ワクチン製剤接種との関係
他の生ワクチン（経口生ポリオワクチン、風しんワクチン、おたふくかぜワクチン、水痘ワクチン、BCGワクチン、黄熱ワクチン等）の干渉作用により本剤のウイルスが増殖せず免疫が獲得できないおそれがあるため、他の生ワクチンの接種を受けた者は、通常、27日以上間隔を置いて本剤を接種すること。

4. 副反応

(1) 重大な副反応

- 1) ショック、アナフィラキシー（0.1%未満）：
ショック、アナフィラキシー（蕁麻疹、呼吸困難、血管浮腫等）があらわれることがあるので、接種後は観察を十分に行い、異常が認められた場合には適切な処置を行うこと。

2) **血小板減少性紫斑病**: 血小板減少性紫斑病があらわれることがある(100万人接種あたり1人程度)。通常、接種後数日から3週ごろに**紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等**があらわれる。本症が疑われる場合には、血液検査等の観察を十分にを行い、適切な処置を行うこと。

3) **急性散在性脳脊髄炎(ADEM)**(頻度不明): **急性散在性脳脊髄炎(ADEM)**があらわれることがある。通常、接種後数日から2週間程度で**発熱、頭痛、けいれん、運動障害、意識障害等**があらわれる。本症が疑われる場合には、MRI等で診断し、適切な処置を行うこと。

4) **脳炎・脳症**: **脳炎・脳症**があらわれることがあるので(100万人接種あたり1人以下)、観察を十分にを行い、異常が認められた場合には、MRI等で診断し、適切な処置を行うこと。

5) **けいれん**(0.1~5%未満): **熱性けいれん**を起こすことがある。異常が認められた場合には適切な処置を行うこと。

(2) その他の副反応

1) **過敏症**: 接種直後から翌日に**発疹、蕁麻疹、紅斑、そう痒、発熱等**があらわれることがある。

2) **全身症状**: 麻しんに対して免疫のない健康児に本剤を接種すると、5~14日後、1~3日間の**だるさ、不機嫌、発熱、発疹等**があらわれることがある。特に、7~12日を中心として20~30%程度に37.5℃以上、数%に38.5℃以上の**発熱**がみられる。被接種者のうち10~20%に軽度の**麻しん様発疹**を伴うことがある。発熱時に、**咳、鼻汁**が出て、**食欲が減退**するものもあるが、これらの症状は、いずれも通常1~3日で消失する。

3) **局所症状**: **発赤、腫脹、硬結、疼痛等**が接種部位にあらわれることがある。

5. 接種時の注意

(1) 接種時

1) 接種用器具は、ガンマ線等により滅菌されたディスポーザブル品を用いる。

2) 本剤の溶解に当たっては、容器の栓及びその周囲をアルコールで消毒した後、添付の溶剤で均一に溶解して、所要量を注射器内に吸引する。この操作に当たっては雑菌が迷入しないよう注意する。また、栓を取り外し、あるいは他の容器に移し使用してはならない。

3) 注射針の先端が血管内に入っていないことを確かめること。

4) 注射針及び注射筒は、被接種者ごとに取り換えなければならない。

(2) 接種部位

接種部位は、通常、上腕伸側とし、アルコールで消毒する。

【臨床成績】

1. 有効性

本剤接種後の抗体陽転率について、生後12月以上の健康小児70名を対象に調査が行われた。本剤0.5mLを1回皮下に注射した後、4週以降に採血を行い抗体測定を行った結果、抗体陽転率は98.6%(69/70例)であり、その平均抗体価は $2^{4.8}$ であった。なお、抗体の上昇が見られなかった1名については再接種後も抗体上昇は見られなかった¹⁾。

2. 安全性

本剤接種後の臨床反応について、生後12月以上の健康小児88名を対象に調査が行われた。その結果、接種後1~2週間ごろ、特に9~12日を中心として37.5℃以上の発熱が11.4%(10/88例)認められ、平均有熱期間は1.5日であった。また同時期に、ワクチン接種による発疹が3.4%(3/88例)認められ、平均持続日数は2.3日であった¹⁾。

【薬効薬理】

麻しんウイルスは経気道的に感染し、上気道及び局所リンパ節で増殖後ウイルス血症を起こして全身の標的器官に運ばれ、発症すると考えられている²⁾。予め本剤の接種により、麻しんウイルスに対する液性免疫及び細胞性免疫が獲得されていると、その後に麻しんウイルスの曝露を受けても、獲得している免疫によってウイルスの増殖が抑制されて発症は阻止される。

【取扱い上の注意】

1. 接種前

(1) 溶解時に内容をよく調べ、沈殿及び異物の混入、その他異常を認めたものは使用しないこと。

(2) 本剤のウイルスは日光に弱く、速やかに不活化されるので、溶解の前後にかかわらず光が当たらないよう注意すること。

2. 接種時

本剤の溶解は接種直前に行い、一度溶解したものは直ちに使用する。

【包装】

瓶入 1人分 1本

溶剤(日本薬局方注射用水) 0.7mL 1本添付

【主要文献】

1) 岡部信彦 他: 予防接種制度に関する文献集, (18): 113(1988)

2) 国立予防衛生研究所学友会編: ワクチンハンドブック: 157-169(1994)

【文献請求先】

一般財団法人 阪大微生物病研究会 学術課
〒 565-0871 吹田市山田丘 3 番 1 号
電話 0120-280-980

田辺三菱製薬株式会社 くすり相談センター
〒 541-8505 大阪市中央区道修町3-2-10
電話 0120-753-280